学校現場から　小学校

コロナ禍での学校を振り返る

青柳勇治

はじめに

私は全校児童約百五十名の公立小学校に勤務し、特別支援学級の担任をしている。本稿では、感染症の発生していない地域の学校の取組や課題を報告する。期間は五月の休校後から十一月中旬までの期間である。

一学期の様子

当校は三学期制である。まず、簡単に一学期の様子を述べる。コロナ禍といっても、幸い当地域周辺では、感染は広がっていなかった。

四・五月の休校は、四月二十五日から五月十日まで、ゴールデンウィークでもあり、実質六日間であった。その後、分散登校を一週間して、通常授業に戻った。六日間の休校と分散登校での時数不足を補うため、夏休みは八月一日から二十三日となり、当初よりも九日分短縮され短い夏休みとなった。

学習進度は、五月の運動会を含め、軒並み行事が無かったので順調に進んだ。学校の方針としては、五・六月は感染予防に重点があり、いつまた休校になるかもしれないので、いわゆる主要教科の国語、算数、社会、理科を中心に授業を進めていた。特に、国語と算数は毎日あり、一日に複数時間もよくあった。

当校の特別支援学級の子どもたちは、国語・算数を中心に支援学級で学習している。私のクラスは二年生二名、四年生三名、五年生が一名である。通常は、一

校時に一学年が基本で、時々二学年合同で学習する時間割になっていた。

しかし、主要教科中心の時間割の頃は、二学年合同が続いたり、三学年合同になったりすることがあった。一時間の授業をするのに三学年分の教材を準備し、同学年でも個別に課題を変えなければならないこともあり対応に困った。介助員さんと協力し、何とか一時間一時間をこなし疲労困憊の日々であった。

また、交流学級の学習進度は、「いつまた休校になるかもしれない」という不安からか速かった。特別支援学級なので、本来は交流学級に進度を合わせる必要はないが、次年度は交流学級へ戻ることを希望する子がいると、つい進度が気になった。実態に合わない進度や課題で、子どもたちに無理をさせているのではないかと反省の日々であった。

授業のやり方は、新学習指導要領全面実施のはずであったが、子ども同士の関わりをなるべく避けて、教師主導の一斉授業を行っていた。

それでも、子どもたちは、学校で学習できることや友達に会えることを喜んでいた。

攻めの二学期

今年の夏は残暑が厳しかった。教室の窓を開放しつつエアコンのフル稼働で乗り切った。暑くても休み時間は、グラウンドや体育館で汗びっしょりになって遊んでくる子どもが多かった。教室に戻れば、マスクをきちんと付けるので習慣化していることを感じた。

この頃の学校の方針は、感染もやや収まっていたので、攻めの姿勢で「今のうちにできることをやってしまおう」と取り組んでいた。

九月上旬には、六年生は佐渡への修学旅行を実施した。体調管理が最優先で、佐渡汽船に乗船する際に検温があり、熱が高ければ乗船できない場合があると告げられた。万一、乗船できない子が出た場合に備えて、級外職員が別の車でバスに付いていくことになった。幸い、全員乗船でき事なきをえた。佐渡では感染症対策をしっかりして、無事に旅行を終えることができた。

五年生は国立妙高少年自然の家で自然教室を実施した。林の中での秘密基地作りや野外炊飯など、自然教室ならではの活動を楽しむことができた。

九月下旬には運動会を行った。運動会については、

詳しく述べる。修学旅行も自然教室も学年単位の活動であったが、運動会は全校での初めての活動であった。運動会は子どもたちにどうしても味わわせたい行事だったので、年度当初から実施を予定していた。企画委員会や職員会議、ＰＴＡ役員と相談して内容を検討した。検討の結果、半日開催で来賓は呼ばない。種目数を減らすため、ＰＴＡ種目・興味走はしない。全校リレーは、密になるので選抜リレーとする。応援合戦は、規模を縮小し、歌は第一応援歌のみとする。

基本方針が決まると、練習が始まった。修学旅行や自然教室後、二週間程度しかなく、かなり慌ただしかった。それでも、応援団長が、「今日の応援は、大きな声が出ていてよかったです。明日は、もっと大きな声を出しましょう。」などと訴える姿を見ると、全校での行事の意義が感じられた。

六年担任が、「やっぱり行事があるといい。やっと六年生が全校の前に立つことができた。子どもたちは運動会がやりたいんですね。」としみじみ話していた。

運動会当日、いつもより保護者の見学は少なかったが、ＰＴＡ役員さんの協力もあり、和気藹々で実施できた。

グラウンド一杯に広がっての応援合戦は迫力があった。応援合戦前後にうがいや手洗いなども行った。どうすれば感染症予防をしつつ、運動会を成功させることができるのか、みんなで知恵を出し合うよい経験となった。

十月は、校外学習、授業の中での話し合い、縦割り班遠足など、感染症対策をして実施可能な学習・活動に果敢に挑んだ。徐々に通常の学校生活が戻ってきた。

コロナ禍で学んだこと

一つ目は、行事や活動をどうすれば実施できるか、みんなで知恵を出し合うことである。運動会は、手洗い・うがい・消毒・半日開催など、知恵を出し合って実施した。十一月半ばの児童会祭りは、各学年の楽しい出店を成功させた。学級会で、子どもたちが「密にならない出店にするにはどうするか」と意見を出し合う姿に驚かされた。当日は、出店に一度に入れる人数を制限するなどして実施した。子どもたちの笑顔が校内に溢れた。

二つ目は、子どもたちの生活や内面に寄り添うことである。子どもたちの遊びを見ていると、体がふれ合

うようなじゃれ合いが減ったように感じられる。マスクをずっと付けたままの生活は慣れてきたが、実際には様々な不都合があると思われる。相手の表情がつかみにくい。しゃべりにくいなど、コミュニケーションに支障を来すことはないだろうか。意図的に子どもたちとおしゃべりしたり、日記などを書かせたりしてコミュニケーションをとる必要がある。

三つ目は、子どもたちの実態に合わせた柔軟な授業づくりである。前述したように、つい学習進度が気になってしまう。学力はきちんとつけなければならない。規律正しい学習集団をつくらなければならない…。たくさんのことが教師には求められるが、「今日の授業は、学習意欲を育てることにつながったか」「今、求められる学力は何か。」などを吟味する必要がある。

二年生に千までの数を教えるときに、丁寧に「一が十個で十。十が十個で百、百が十個で千だね。」と図やブロックを使って丁寧に教えても、「だから、何？」という表情をされたことがある。そこで、おもちゃのお金を使って、お店屋さんごっこをすることにした。十円が十個で百円、百円が十個で千円になる。「リンゴください」「百五十円です」「（百円玉一つと十円玉を五個数えて）これでいいですか」「いいですよ」などとお店役とお客役に分かれて楽しんだ。子どもたちは遊びを通して、位取りの考え方を身に付けることができた。

四つ目は、保護者・地域や行政と協力することである。政府のマスク配付と前後して地域や行政からマスクの寄付・支給が数回あった。マスクが不足していた時期だったので、本当に助かった。行政からは、消毒液の配給、自動水栓への取り替え、エアコン使用の奨励、「オンライン授業」に向けての研修など、全面的なバックアップがあった。

保護者は、毎日の検温や体調不良の際の欠席対応など、協力的である。

おわりに

コロナ禍は十一月中旬から第三波がきたといわれている。今後、当校も厳しい対応が迫られるかもしれない。

しかし、各地域・各校の感染状況は異なるはずである。状況に応じた柔軟な対応と子どもも含め、教育に携わる者が知恵を出し合うことが必要であると考える。

（あおやぎ　ゆうじ・長岡市）